

花園讃歌

文鳥

彼に似合うは爛漫たる桜花
生き様一つで誰をも狂わす
散り様までもが美しかろう
醜さを抱えておらねば到底許せぬ
世の中にたえて貴方のなかりせば
そんな浮世の泥濁に
絡め取られぬ精神美

例えば彼女は揺らめく藤花
高貴な色を纏えども驕らぬ
優しい心根には頭が下がる
甘やかに迎えられたなら酔酩必至
嫋やかな姿に見惚れて侮るなかれ
きつと想像できまい
決して離れぬ忠誠心

あの子はまるで空眺む木蓮
俯く事なかれと言外に告ぐ
その背中をこそ数多が仰ぐ
慈愛を撒けど何人たりとも並べず

威厳を示せど何人たりとも弄ばず
誰も彼もの目を奪う
万天に背かぬ高潔さ
来たる炎陽に怯えるよりも
ただこの日この時に祝福を
巡り合わせの奇跡に喝采を
手折れぬ矜持をゆめ憐れむなかれ
散りゆくと知りつつも春陽に咲う
彼らを誰が笑えよう
万彩を謳え花園讃歌